■■■第七期研究会報告■■■

第七期（2016 年 8 月～2017 年 7 月）には、計 9 回の研究会（内訳：書評会 1 回、研究報告会 5 回、研究ワークショップ 3 回）を開催した。

下記の研究会報告にもあるが、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター平成 28 年度「プロジェクト型」共同研究に関する活動が第七期では大きな比重を占め、最終的には 2017 年 3 月に北海道大学で開催したワークショップへと結び付いた。

その他、マイノリティの文化実践、および彝（い）族の言語と文化に関するワークショップなどもあり、前期と比べてさらに多彩な活動報告となった。

また、以上のプロジェクト以外にも会員による多様な研究報告も行われた。そして、いつもながらのことではあるが、それぞれの研究会では、参加者による闊達な議論が交わされた。

第五十九回研究会

（2016 年 10 月 16 日、
於：東京外国語大学海外事情研究所）

【研究報告】東欧の「境界（ボーダー）」における領域性・空間認識の比較研究：戦後チェコ国境地域(Pohraničí)をめぐる方法論的試論

［報告者］森下　嘉之（茨城大学）

概要

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター平成 28 年度「プロジェクト型」共同研究利用の一環として、翌年（2017 年）3 月のワークショップにむけての準備報告を行った。まず、第二次世界大戦直後の時期に限定したチェコ「国境地域」をめぐる概念整理と研究動向の紹介を行い、どのような視点から東欧における「境界領域の変容」というテーマを共通論題として取り上げるのかについてのすり合わせを行った。具体的には、戦後直後の当該地域において開催された「戦後復興」を主題とした博覧会、および入植政策のプロパガンダについての分析を行った。本研究の特色として、近年の研究動向においての焦点である地理学研究の方法論がどこまで適用されうるのかについて、現地の地理学研究者と情報交換を行ったことがあげられる。

（森下　嘉之）

第六十回研究会

（2016 年 11 月 20 日、
於：東京外国語大学海外事情研究所）

【研究報告】トランシルヴァニアをめぐる学術政策と領土修正：第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールを題材に（1940～44 年）

［報告者］辻河　典子（近畿大学）

概要

第二次ウィーン裁定（1940 年 8 月）により、ハンガリーは第一次世界大戦後にルーマニアへ割譲したトランシルヴァニアのうち、北部の地域を 1944 年夏まで再び支配した。本報告ではトランシルヴァニアでの主要な文化都市コロジュヴァール〔クルージュ〕における 1940～44 年の学術組織の活動に注目した。この時期の同市には、第一次世界大戦後のセゲドへの移転から「再開」された大学、政府主導で設立されたトランシルヴァニア学術研究所、19 世紀の国民博物館創立を目指す運動から始まって戦間期を通じて活動を続けたトランシルヴァニア博物館協会が鼎立していた。各組織はハンガリー文化の調査や教育を通じて交流もみられたが、博物館協会内からは政府主導のトランシルヴァニア学術研究所の活動への批判もあった。

報告を受け、トランシルヴァニアという地域の歴史的位置づけとハンガリーの学術政策との関連や、第二次ウィーン裁定によってトランシルヴァニア内に引かれた国境線が現地住民に与えた影響などについて議論がなされた。

（辻河　典子）

第六十一回研究会

（2016 年 12 月 10 日、於：獨協大学）

【WS】マイノリティの文化実践と現代社会：台湾原住民の例を中心に

［登壇者］（登壇順）

松岡　格（獨協大学准教授）
岡田　紅莉子（上智大学大学院）
田本　はる菜（筑波大学大学院）
李　依真（東京大学大学院）
奈良　雅史（北海道大学助教）
井垣　昌（明治大学等兼任講師）
栗林　大（中央大学客員研究員）
香坂　直樹（跡見学園女子大学等兼任講師）
角田　延之（四日市大学等兼任講師）
山田　仁史（東北大学准教授）
山本　芳美（都留文科大学教授）

概要

2016 年 12 月 10 日に、獨協大学にて「マイノリティの文化実践と現代社会：台湾原住民の例を中心に」と題するワークショップを開催した。

冒頭では、趣旨説明を兼ねて、筆者（獨協大学准教授・松岡格）が「多文化時代の文化実践と国家・民族：フランスのヴェール問題が投げかけるもの」と題する報告を行った。主として本研究会で数度にわたって扱ったいわゆる「ヴェール問題」に関する議論を手がかりにして、多文化時代における文化実践のあり方について検討し、台湾原住民の文化実践についての検討を提起するものであった。

続いて岡田紅理子（上智大学大学院博士課程）が「都市アミの表象：イリシン（豊年祭）にみる台湾原住民族アミの都市移住者が織りなす『文化』と自己」と題する報告を行った。台湾原住民の中でも郷里を離れて都市で生活する人々の文化実践を観察対象とし、豊年祭実施に関する観察・考察をふまえて、都市における豊年祭への参与を通して主体的なアイデンティティ構築を行う原住民の姿を描き出した。

田本はる菜（筑波大学大学院博士課程）は「纏う布と見る布：北部台湾原住民と布をめぐる営みの複数性」と題した報告を行った。原住民の伝統衣装というのは、近年、台湾社会内でその価値が認められ、より広く流通することによって商業化の道をたどってきた。その流れにしたがって原住民の服飾製作は変化してきたが、一方でその一種の時流とは異なる方向の服飾製作をめぐるこだわりというのも存在する。そのような現代の台湾原住民の服飾製作を通した文化実践の多様な経路の存在を指摘した。

李依真（東京大学大学院博士課程）は「境界措定的力としての首狩り：法秩序の権/暴力（Gewalt）の視点から見る台湾原住民族の首狩り」と題する報告を行った。台湾原住民の文化実践のうち、いわゆる「首狩り」をとりあげて、それが文化実践として途絶えた後も、台湾社会における原住民イメージに大きな影響を与えたことを指摘し、法秩序についての哲学的な論考を通して近代法的権力を共同体を維持する法秩序措定権力の一種としてそれを再考することで、首狩りを理解可能なものとしてとらえることができることを指摘した。

奈良雅史（北海道大学助教）は「イスラーム復興と民族観光のもつれ：雲南省回族社会における民族間関係の変化をめぐって」と題する報告を行った。中国雲南省に暮らすムスリム住民、回族は現在、従来より積極的に外部の観光を受け入れるようになっている。従来の議論では政府と宗教実践を追究しようとする回族についての対抗関係に注目が集まったが、回族によるより柔軟な宗教実践の試みとして理解すべきことを指摘した。

以上の報告に対して、井垣昌（明治大学等兼任講師）、栗林大（中央大学客員研究員）、香坂直樹（跡見学園女子大学等兼任講師）、角田延之（四日市大学等兼任講師）、山田仁史（東北大学准教授）、山本芳美（都留文科大学教授）等が、それぞれの研究事例に適宜言及しつつコメントを行った。

（松岡　格）

第六十二回研究会

（2017 年 1 月 8 日、
於：東京外国語大学海外事情研究所）

【研究報告】

・「スロヴァキア」の領域を科学的に見る戦間期の取り組み

・モンテネグロ国民か、セルビア正教徒か：社会主義ユーゴスラヴィアにおけるニェゴシュ廟をめぐる論争

［報告者］香坂　直樹（跡見学園女子大学）
中澤　拓哉（日本学術振興会）

概要

まず、香坂直樹が「『スロヴァキア』の領域を科学的に見る戦間期の取り組み」の題で報告した。香坂はまず第一次世界大戦直後のチェコスロヴァキアにおいて、チェコ諸領邦と比較し「スロヴァキア」の領域が把握されていなかったことを指摘する。そしてハンガリー王国時代からのセンサスとその解釈を検討し「上部ハンガリー」から「スロヴァキア」への領域概念の転換を跡づけた。

続いて、中澤拓哉が「モンテネグロ国民か、セルビア正教徒か：社会主義ユーゴスラヴィアにおけるニェゴシュ廟をめぐる論争」の題で報告した。中澤は社会主義期にモンテネグロ・ナショナリズムを支える制度的基盤が整ったことを指摘したのち、ニェゴシュ廟の建設をめぐる論争を社会主義下で形成された「モンテネグロ民族」の実在性をめぐるものと位置づけた。

（中澤　拓哉）

第六十三回研究会

（2017 年 2 月 10 日、 於：獨協大学）

【WS】彝（い）語の世界
：言語・文字とその世界観

［登壇者］（登壇順）

飯島　一彦（獨協大学教授）
浅山　佳郎（獨協大学教授）
関根　謙（慶應義塾大学教授）
吉克・依楚（彝族伝統文化継承者）
立克・達曲（彝族伝統文化継承者）
松岡　格（獨協大学准教授）
村松　彰子（相模女子大学専任講師）
佐藤　勘治（獨協大学教授）
Juan Carlos Galeano
（フロリダ州立大学教授）

概要

2017 年 2 月 10 日、獨協大学にて国際シンポジウム「彝（い）語の世界：言語・文字とその世界観」を開催した。

シンポジウムでは、三部に分けて、中国の少数民族「彝族（いぞく）」の文化や社会、そして彝族が話す「彝（い）語（ご）」に関しての研究成果が発表された。

第一部「彝族の社会と文化」では彝族の歴史と社会についての解説に続いて、飯島一彦（獨協大学国際教養学部教授）による「花の歌謡：彝族文化と日本文化」、浅山佳郎（獨協大学国際教養学部教授）による「母語教育としての彝語教育」の二報告が行われた。いずれも獨協大学の国際共同研究における調査成果を示すものであった。

続いて関根謙（慶應義塾大学文学部教授）による関連研究報告が行われた。これは関根教授等による彝族についての調査・研究の紹介と、その研究成果をふまえて彝族社会についての分析を示すものであった。

第二部「古彝文経典の世界」では古彝文経典についての解説につづいて、彝族の伝統文化継承者である吉克・依楚（伝統文化継承者）と立克・達曲（伝統文化継承者）による報告が行われた。吉克・依楚は儀礼の実践者の立場から、古彝文経典についての見解を示した。立克・達曲は、訳者の立場から今回シンポジウムで特に紹介した『生育経』の内容についての解説を行った。筆者（獨協大学国際教養学部准教授・松岡格）は、上記国際共同研究の調査・研究成果として、古彝文経典『生

育経』についての紹介と学術的分析を行った。

第三部「マイノリティの伝統的知識：比較と討論」では、彝族の事例について比較検討するため、二つの地域についての事例が報告された。村松彰子（相模女子大学人間社会学部専任講師）は「沖縄のシャマニズム」において、沖縄においてシャマニズムを実践する人々をとりあげ、沖縄の文化におけるその実践の重要性を指摘した。もう一つの事例は南米であり、まず佐藤勘治（獨協大学国際教養学部教授）によるアマゾンに暮らす森の民についての解説があった。その内容を受けて、Juan Carlos Galeano（フロリダ州立大学教授）は、自らの調査や詩作の紹介を通じて、森の民から見た世界観、そして人類の未来を展望するにあたってのその重要性を指摘した。

以上のような多彩な報告がなされ、これに対して活発な質疑応答が行われた。

（松岡　格）

第六十四回研究会

（2017 年 3 月 5 日、
於：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

【プロジェクト型共同研究 WS】
東欧の「境界」における領域性・空間認識の比較研究

［報告者］（報告順）
香坂　直樹（跡見学園女子大学）
辻河　典子（近畿大学）
森下　嘉之（茨城大学）

［コメンテータ］
佐藤　勘治（獨協大学）
松岡　格（獨協大学）
栗林　大（中央大学）

［アドヴァイザー］
家田　修（北海道大学・開催時）

北海道大学ワークショップを終えて

1 年前から進めてきた研究プロジェクト、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター平成 28 年度「プロジェクト型」共同研究利用におけるワークショップを、2017 年 3 月 5 日に北海道大学にて開催した。まだ雪の残る札幌で当日は筆者含め 6 人の報告者・コメンテータに登壇していただき、丸 1 日の長丁場であったがアドヴァイザーを含めて活発な討論を行うことができた。東欧の境界領域を台湾、米墨国境の事例から相対化することを目指した上で、個別報告のみならず全体の趣旨をまとめ、研究課題・議論を方向付けることは想像以上の難しい課題であった。登壇者および参加者からの鋭い提言によって、境界の「実体化」や入植住民の「所有権」の問題、国境管理と住民登録の方法といった今後の課題が提示されたことは今後への大きな収穫であった。

（森下　嘉之）

第六十五回研究会

（2017 年 4 月 29 日、
於：東京外国語大学海外事情研究所）

【研究報告】新自由主義的世界における多文化主義の隘路：ガッサン・ハージのホワイト・マルチカルチュラリズム批判に基づいて

［報告者］栗林　大（中央大学）

概要

報告では、欧州諸国における「多文化主義の失敗」言説の広がりを念頭に、今日的な多文化主義のネオリベラルな変容をとりあげ、その再構成の可能性に言及した。

初めに、W. キムリッカや C. ヨプケの議論を参照し、多文化主義政策の新自由主義的な変容を踏まえてリベラリズムと多文化主義の理念的なアポリアを指摘、リベラル多文化主義の陥りつつある隘路にふれた。次に、オーストラリアの人類学者 G. ハージの議論を軸に、グローバリゼーションの下での国民国家／福祉国家のネオリベラルな転回とともに多文化主義のもつ統治的な側面や排外主

義的なナショナリズムが前景化するメカニズムを論じ、彼の議論の全体像とその援用可能性を検討した。最後に「ケア」の概念を起点としたオルタナティヴな多文化主義への方向性を試論的に示唆した。

報告を踏まえて「多文化主義の失敗」言説の有効性や報告者の想定したリベラル多文化主義のアポリアに対して疑問が呈され、それを契機に活発な議論が交わされた。また、ハージの議論の射程にも関心が寄せられ、ハージの語る「思いやること（=care）」と「ケアの倫理」等で語られるケア概念との共約可能性など多岐に渡る示唆的な検討課題を得ることが出来た。

（栗林　大）

第六十六回研究会

（2017 年 5 月 14 日、
於：明治学院大学白金キャンパス）

【研究報告】台湾原住民族の首狩とその歪められた表象の再解釈：法のゲヴァルトの視点から

［報告者］李　依真（東京大学大学院）

概要

台湾原住民族の慣習であった首狩は、祖霊信仰に密接な関係を持ち、かつて社会秩序を統合・維持する機能を有するものであった。しかしその暴力性とアニミズム的思考により、長い間、文明に背くような、野蛮な暴力とされていた。本報告の主旨は、首狩を文化的側面で解釈する捉え方が文明/野蛮という対立を解決できないとし、法のゲヴァルト（Gewalt、権力と暴力とを同時に含む力の概念）からアプローチすることを提言するものである。行為遂行的原理をもって首狩の力を分析し、その法措定・法維持的機能の前景化により、過去の原住民社会を固有の法秩序をもつものとして、近代的法体系と対置する。この対置を背景に、日本統治時期における、台湾の初めての近代国家への編入において、首狩をあらゆる根絶すべく野蛮な行為の象徴とした政治的力学を分析する。本報告はまず、同時期の首狩表象と呉鳳物語の改編に遡り、次に 1980 年代の原住民運動と首狩表象の関係を説明し、最後に、近年台頭した移行期正義の言説において首狩の再解釈が歴史的正義の追求に要請されると主張する。

（李　依真）

第六十七回研究会

（2017 年 6 月 18 日、
於：東京外国語大学海外事情研究所）

【書評】Eagle Glassheim, *Cleansing the Czechoslovak Borderlands.*

［担当］森下　嘉之（茨城大学）

書誌情報：

Eagle Glassheim, *Cleansing the Czechoslovak Borderlands. Migration, Environment, and Health in the Former Sudetenland,* Pittsburgh, 2016.

概要

本書は、第二次世界大戦直後から社会主義期にかけてのチェコ「国境地域」の歴史をまとめた最新の研究。社会主義による開発と「近代性」については、J. スコットが提示した議論との整合性は認められる一方で、地域概念の歴史的コンテクストへの詰めが甘く、地域が実体化されているように読めたという議論が出た。また、本書の特徴として、近年の記憶研究の応用から「ノスタルジア」という概念を押し出しているが、個人的経験が全面に出て、アカデミックな議論ではないのではないかという議論もあった。さらに、21 世紀のチェコ国境地域をめぐるチェコ・ドイツ記憶政策について（肯定的に）取り上げている部分は、両国の政治的意図への考察が甘いのではないかという議論も出た。様々な研究方法が試みられている反面、政治的に足をとられているかのように見える叙述が目立ち、文字通り「実験的」な研究であると感じられる。

（森下　嘉之）

■□■他学会参加報告■□■

西南民族大学での学会報告

昨年（2016 年）10 月末に、四川省成都西南民族大学で開催された「世界少数族裔文学国际研讨会」に参加し、発表と司会役を担当した。本来であればこの場をお借りしてこれまで私が参加した国内・海外の他の学会との比較や学会の内容説明等を行なうことを求められているのかもしれないが、比較しようにも学会であるというあまりにも根本的な点を除けば、むしろ共通点を見出すことが困難なくらい新鮮かつ異質な（それ故に、貴重かつ素晴らしい）空間であるように思われたため、比較はおこなわず、学会で感じた「空間構成」について簡単に話したいと思う。

私たちに馴染みのある従来の会場設定はパネリストもしくは発表者や講演者が壇上に位置し、聴衆がそれに「対峙する」という構図をとる。しかし、今回参加した西南民族大学での学会はパネリストが会場奥に陣取ることは共通しているものの、他の発表者は大きなコの字に配置されたテーブルにすわり、他の聴衆はその後ろ側にある聴衆席に座った。つまり、パネル席と他の発表者の席が正方形の四辺を構成し、聴衆席はその後ろ側となる。この構図は実に興味深かった。というのは、この四辺に囲まれた空間は「舞台」を作り上げ、Q&A の時間には発表者と聴衆からの質問というやりとりが中心になることはなく、発表者自身と司会、および他の発表者達が、自発的にコメントを述べ、皆で一つの発表を作り上げ、舞台空間に一つのパフォーマティブ・アートを作り上げる。事実、開会式では彝族の学生らによる合唱が正方形の舞台の中心で披露され、舞台空間としての発表の場という性格付けをおこなった。私には、アカデミックな場としての同学会が、人文学が対象とする文化的活動そのものとの融合を図っているように感じられた。

以上が私なりの感想であるが、その他 15 分の発表時間が大会 1 週間前に 8 分に変更となったという連絡が運営側から届いたり、大会当日にパネルの司会を任されたりと、国際的になるということには高度の柔軟性が要求されることを痛感させられ、その意味でも大変勉強になった。

（JA 日下）